日本聖書神学校 学報
Japan Biblical Theological Seminary
〒 161-0033 東京都新宿区下落合 3-14-16・☎ 03-3951-1101 ～ 2・Email: jbts@jbts.ac.jp

2023 年 12 月 15 日
第 174 号
発行人　神 保　望
【後援会献金口座】
郵便振替：
00110-3-6435
加入者名：
学校法人聖経学園
日本聖書神学校

【巻頭言】

コピーの束から

教　授　柳下明子

今号の内容

巻頭言　1
全校修養会報告　2
夏期伝道実習報告　3
第 57 回卒業生研修会報告　4
学習環境整備資産設置のご報告　4

亡くなった恩師の書庫を少しずつ整理している。夏休みに 2、3 日を使って、書庫のある軽井沢を訪ね、書誌データをつくる作業である。

今年の夏、書庫にコピーの束を見つけた。表紙につけた厚紙に恩師の几帳面な筆跡で『されど神の言は繋がれたるにあらず』ニーメラー、と記されている。表紙も本文も茶色く変色したそれをご家族にお願いして持ち帰らせていただいた。

原本は 1951 年に新教出版社から発行された國谷純一郎氏訳の本で「ダハウ獄窓説教」の副題がつけられている。原著の発行は 1946 年である。本書は副題にあるようにマルティン・ニーメラーがダッハウの強制収容所内で語った 6 回の説教のまとめである。7 年の収容の後、初めて 6 人の収容者との礼拝が許可された 1944 年 12 月 24 日のルカによる福音書 2 章 10-12 節のメッセージ「馬槽の中に」に始まり、1945 年 4 月 2 日復活月曜日のヨハネによる福音書 20 章 11-18 節「復活の朝」で結ばれている。

この最初の説教、つまりクリスマスのメッセージで、ニーメラーは獄中で会衆と共に神を取り戻そうとしてこのように語る。「神は、人類が遂には世界を完全に破壊してしまうように欲して、この世界を離れ去つてしまわれた」かのように思われる、「幾百幾千幾萬の人々が無惨にも滅んで行くこの時に」（13 頁）神が自分に関心を示すとは思えないと自分たちが感じていることがクリスマスの使信を受け取ることを妨げていることを直視する。しかし「聖書が『救主』と飜譯しているこの言葉は、本来解放者―私共がもはや私共自身を助けることが出来ないときに助けをもたらす人、を意味している」（18 頁）ことに会衆共々立ち返らせる。そして「神から離れ落ちているこの世に、それを救わんがために嬰児として来たり給うた彼が、私共の中にも亦入り給い、私共にも彼の救いをもたらし給い、私共にも彼の悦びを與え給うように」イエス･キリストに懇願しよう、とそのメッセージを結ぶ。

このメッセージは『時を刻んだ説教』（ミヒャエル・ハイメル、クリスティアン・メラー著、徳善義和訳、2011 年、日本キリスト教団出版局）の中でも取り上げられている。ハイメルは「ニーメラーがこの説教で集中していることは、二つの点に集約される。神が人間、それも最も慰めのない人間のところに来てくださるという慰めの使信と、神が救いに来られ、人間を罪の奴隷から解放してくださるという解放の知らせとである。この二つの点が共に捕らえられている人々の状況の中へと強く語りかけられたのである。もちろんそれは、捕らえられている人々が自分自身の内に取り残されるという仕方ではなくて、信仰の出発点へと促され、彼らが自分自身に留まるか、神に布と飼い葉桶において肉をとって来られ、十字架におけるその終わりがいかなるものであるかを既に示しておられる神に信頼しつつ委ねようとするかの決断に立たされたのである。『飼い葉桶と十字架』、ニーメラーの説教にはテーマとしてこういう題を付けることができよう」（315-316 頁）と結論する。

長年この説教集のコピーを書庫に大切に保存していた恩師もまた、ニーメラーの獄中説教によって信仰の出発点へと促され、神に委ねて歩むことへの決断に立たされ続けたのだと思う。

書庫を整理する内に気がつかされる 2017 年に亡くなった恩師の晩年の関心は、ナショナリズムの台頭とニヒリズムにどのように対峙するのか、ということと、明治期の日本は果たしてどのようにキリスト教を受け入れてきたのか、ということであったようだ。自らの受け継いだ信仰の出発点に立ち戻り、今を生きる事への問を神の前で自分に問い続けた姿がそこからは浮かび上がる。

世界に戦争が広がり、多くのいのちが失われ続ける報道に接し、自分の無力感を感じているわたしたちには、神がなおわたしたちに関わってくださるという確信が必要だ。

恩師の書庫から持ち帰ったコピーの束は、いつまでも繰り返し「飼い葉桶と十字架」にわたしを立たせてくれるにちがいない。

全校修養会報告

教授　古谷正仁

今年度の全校修養会は、「BC 級戦犯にされた神学生」を主題に、10 月 27 日（金）～ 28 日（土）の両日、日本聖書神学校を会場に開催された。講師は日本キリスト教会東京告白教会長老で東京農大教授でもあり、『BC 級戦犯にされたキリスト者　中田善秋と宣撫工作」（いのちのことば社）の著者である、小塩海平氏であった。

「宣撫工作」とは、1941 年に日本から派遣されたキリスト者 26 名が担った、フィリピン国民に対する戦争協力者養成のための種々の工作活動のことである。今回の修養会は、1 日目に講師による講演と質疑応答、2 日目には朝の礼拝と分団協議が主のものであったが、講師の講演においても、当時の教会の国家に対する戦争協力は、決して及び腰のものではなかったことが具体的に論証され、教会は、体質的にそれを保持していたのであり、しかも今日に至るまで問題視する姿勢は殆どなかったという問題性を指摘された。プロテスタント側の 12 名の中には、戦後日本の教会で活躍した著名な牧師達の名前を散見することが出来る。この人々の多くに、自らの生き方を悔い改めた形跡はほとんど見られないことも、一つの悲しい現実である。

そのような中、当時神学生であった中田は英語力を買われて工作員に抜擢され、信仰者としての真面目さと情熱から熱心にその活動を展開した。工作班は 1942 年 12 月には解散しているが、中田一人フィリピンに残り、日本とフィリピンの架け橋となろうとした。しかし 1943 年以降の戦局悪化に伴い、日本軍は抗日ゲリラ掃討を名目に一般住民の虐殺に走り、そして 500 名以上（一説には 700 名）の住民を虐殺したサンパブロ事件が起こした。彼はこの住民虐殺計画に命懸けで反対し住民救出に努めたが、関与を問われ

戦犯として重労働 30 年の刑が宣告されたのである。

彼は命懸けで救出したフィリピン人から「彼は日本人だから死刑にすべきだ」との証言をぶつけられた。日本人であることの罪が、彼に容赦なく襲い掛かったのである。刑に服する中でその罪を担うことを決意した彼は、釈放後信仰は捨てなかったが、被害者意識しかない教会を捨てた。その痛みを受け止めつつ、彼が捨てた教会に連なることの意味を、一人一人が問わなければならないと、心に深く刻んだ修養会であった。

---

2 年　内田弥生

2023 年 10 月 27 日(金)、28 日(土)を通して、日本聖書神学校修養会が開催されました。今年は、東京農業大学国際農業開発学科教授である小塩海平先生を講師にお迎えし、「BC 級戦犯にされた神学生――中田善秋と宣撫工作」というテーマで講演を賜りました。宣撫工作班に抜擢された神学生の姿を当初の時代背景や中田善秋の生き方が、慧眼を以て解説され、私たちの目が開かれました。宣撫工作とは、軍隊占領地において軍政を施行する際、被占領地住民が敵対せずに協力するよう住民を懐柔する行為とされています。小塩先生の著書『BC 級戦犯にされたキリスト者』には、「キリスト教における『福音宣教』と『宣撫工作』との違いはなんだろう」という書き出しで始まっています。1941 年、日本神学校在学中に宣撫工作員としてフィリピンに派遣され、サンパプロ事件に対する容疑により BC 級戦犯とされ、重労働 30 年の刑を言い渡されスガモプリズンに服役した中田善秋。一体何が神学生の身に起きたのか。私たちキリスト者であり神学生でもある者が深刻に受け止めるべき講演となりました。

最初に小塩先生は、「神学校でこの話をするのは初めてです」と挨拶されました。「日本キリスト教会史の本にも、宣撫工作班を派遣したことすら記されていない。」この無視された歴史について、書かれた歴史と中田の歴史にはだいぶん違う光と陰があると語られました。

送り出した教会に責任はないのか？戦時下における日本人の残虐な行為は決して他人事ではなく、私たち一人ひとりが背負っていく十字架であることを知りました。

28 日は朝 9 時の礼拝から始めました。古谷先生は説教で「戦争という大きな構造悪の中で、日本人であることの責任を彼は引き受けたのではないか。教会が神の言葉を語らない時、宣撫工作員を出してしまう。中田さんは、信仰は捨てなかったが教会を捨てた。新しい命を、そしてキリストに従う仲間を、彼は教会の中に見つけることはできなかった。私たちは、中田さんに捨てられた教会に集っているのだ」と語られたのが印象的でした。

見捨てられた教会に集う私たちが、この不穏な世界情勢の中で日本人としてどのように生きるか。平和という神の語られる世界を、聖書の中に問い続けていかなくてはならないという重い課題を担うものとなりました。今回の修養会が、こうしたそれぞれ一人一人が信仰を問い直す恵みのうちに終了したことを感謝いたします。

夏期伝道実習

アジア学院、那須塩原伝道所、益子教会　久保彩奈（３年）

2023 年 8 月 29 日～ 9 月 3 日にアジア学院、那須塩原伝道所、益子教会において夏期伝道実習を行いました。

アジア学院は有機農業とリーダーシップを学び合う専門学校です。研修生たちはアジアやアフリカの特に貧しい農村地帯から、その地域のリーダーとなる人材が招かれており、約 9 ヶ月間寝食を共にしながら学んでいます。私はボランティアとして、研修生たちと生活を共にさせていただきました。朝は 6:30 から始まる農作業に始まり、研修生・スタッフ全員で行うミーティング、午後からは鶏舎での作業、夜はゴスペルの練習や祈祷会での証、と慌ただしくも充実した 3 泊 4 日を過ごしました。有機農業のあり方や地域資源をいかに活用するかなどの学びも多くありましたが、何よりアジア学院に集っている人たちがとても印象的でした。那須塩原伝道所の牧師でもあるジョナサン・マッカーリー先生をはじめとする宣教師の方々、また研修生としている司祭や神学校教授たちの奉仕の姿勢には圧倒されました。「母国に帰って必ず地域の人たちの助けとなるために、今ここで学んでいる」という熱意には感服しかありません。またコロナ禍で希薄だったエキュメニカルなキリスト教に触れる貴重な時でもありました。

9 月 1 日からは今野善郎先生のご自宅に泊めていただき、今野先生がボランティアをされている「アウシュビッツ平和博物館」(福島県白河市) の見学や、益子教会と那須塩原伝道所での礼拝奉仕の機会を与えられました。地方教会の辛抱強く努力を惜しまない宣教のあり方や、信徒の方々へのきめ細やかな配慮は、大下正人先生、今野先生の温かなお人柄を感じると同時に感銘を受けました。

アジア学院の皆さんと川へピクニック

今野先生は「夏期伝道実習ではなく、夏期ラーメン実習だよ」とおっしゃるほどに、美味しくて楽しい時間を惜しみなく与えてくださいました。「登頂（アタック）するように、人生も挑戦し続けたい」と笑顔でおっしゃる今野先生のお話はどれも印象的で、心が震えました。私も、与えられた場所で挑戦し続けたい、と思い新たにする夏期伝道実習でした。

九州教区奄美地区　東出英幸（３年）

8 月 18 日～ 25 日にかけて、九州教区奄美地区へ夏期伝道実習を行う機会に恵まれました。奄美地区には 3 つの島に 3 教会、1 伝道所が礼拝を守っています。今回はその中の奄美大島の 2 教会（瀬戸内教会、名瀬教会）を訪れるとともに、奄美地区主催の夏期学校の運営に参加しました。羽田からの空路、奄美空港を前に、絵画のように美しい海の景色に迎え入れられて、奄美での初日がスタートしました。その日のうちに瀬戸内教会付属「かな保育園」の職員会議に陪席し、保育園運営上の課題を丁寧に解決する園長、副園長の姿が印象深いものとなりました。この対話する姿勢は、私と奄美地区の教師の方々との間でも、滞在中によく行われました。これは相互理解を促すものであると同時に、課題（たとえば夏期学校運営）を共有して、お互いに解決策を作り上げて、実践して行くものでした。日曜日には瀬戸内教会、名瀬教会で説教奉仕を行い、それぞれの教会の会員のみなさまと交わりを持つことが出来ました。加えて、奄美大島への伝道の歴史を教師から聞くことによって、島に建てられた教会への思いを知ることにもなったのです。

8 月 22 日から 24 日までの三日間は、奄美地区の夏期学校が開催されました。奄美大島、徳之島の子どもたちを迎えて、住用内海公園バンガローでキャンプを行いました。夏期学校期間中は、海あそび、カヌー体験、レクレーションなど豊富な行事が行われました。行事以外では、朝のメッセージや食事の準備、子どもたちの身の回りのお世話をすることで、心身ともに奉仕することの大切さを改めて感じました。そして自然が豊かなこの奄美の地で、子どもたちが伸び伸びと走り回る様子は、私に活力を与えてくれました。

また奄美地区の 5 名の教師の皆様が、普段からお互いに信頼し合い、連携されている様子を実習の端々で見ることが出来ました。夏期学校では特にそのことがよく現されていたと思います。それは先述の対話の積み重ねにあることは間違いないでしょう。「島」の教会の在り方、牧会の姿が、まさにそこにあると思うのです。こうした経験を神学生の間に実習を通して学べたことは、大変貴重なものだったと思います。快く受け入れて下さった奄美地区の皆様に、この場をお借りして感謝を申し上げます。

第 57 回卒業生研修会報告

同窓会役員・教授　小林祥人

今年の卒業生研修会は神学校を会場にして 8 月 21 ～ 22 日の二日間にかけて行われました。テーマは「コロナ後における宣教の希望」。一日目は開会礼拝（平澤昇同窓会副会長による説教）に続き、小友聡先生を講師に迎え、「絶望に寄りそう聖書の言葉」と題して主題講演をいただきました。副題は「コヘレトの言葉の謎を解く」で、「コヘレトの言葉」の研究で多数の著作を発表されている小友先生から、旧約の中でも一般に難解とされ、やや取りつきにくい感のあるこの書物について丁寧で緻密な解説を聴くことが出来ました。聖書学上の諸問題にとどまることなく、教団の教師でもある先生からは、今日的な聖書の新しい読み方にも指針が示されました。特に「与えられた現在を強く生きていく」という、「生」に対する積極性に満ちた思想が、これまで「厭世的」「虚無的」と評されることの多かったコヘレトに込められているというところなどは、わたしたち現場日仕える者にとっても大きな学びでもあっただけでなく、キリスト者以外の方々にも強く訴えかける内容ではなかったでしょうか。講演終了後の小グループでも、小友先生を囲んで限られた時間に収めきれないほど聖書学的また実践的な議論が充実し、さらに学びを深めることが出来ました。

二日目には追悼礼拝（説教は小河由美子同窓会長）を守った後、金子直子さん（東中国教区セクシュアル・ハラスメント防止小委員会副会長）をオンラインでお迎えし、「被害者をさらに傷つけないために～最新ハラスメント事情を通して」というテーマで講演をいただきました。「ハラスメント」と呼ばれる多くの事柄についてについて広く学ぶ機会が与えられました。

その後は神保望校長による神学校アワーで神学校の現状と今後の展望が紹介され、そのあとでは同窓会総会が開かれました。

また、オプションプログラムとして持たれた太田春夫先生の講演では、幼稚園や保育園などの付帯施設を有する教会の取り組みについて学びました。40 年にわたる牧会者としての生活の中に「牧師として付帯施設の経営や運営に携わる」ことの難しさを感じつつも、その働きの尊さをも見る思いがしました。

二日通して参加は 55 名でした。教会の内と外とに関わってくださる神様のみ言葉を生きる者として、どのプログラムも時間の短さを惜しみつつも、わたしたちの宣教の場にただちに生かすことのできる、傾聴すべきところのたいへん多いと感じる研修会となったと思います。

学習環境整備資産設置のご報告

校長　神保 望

2023 年 1 月 30 日に開催された日本聖書神学校第 281 回理事会では、「学習環境整備資産設置の件」が上程され、全会一致で承認されました。これは 2022 年 10 月に来校された或る方が、神学生の学習環境整備のためにおささげ下さった 1000 万円を原資としています。P.S. メーヤー宣教師ご一家が住まわれた住宅（メーヤー館）でかつてお手伝いをされ交わりを深められたご経験を持つご母堂様から多くの思い出を聞いておられたお嬢様が、「メーヤー先生ご夫妻に対する亡き母の感謝の思いを表したい」とのお考えによって実現しました。来校された際に直接お話を伺う機会を得た私は、ご本人とご母堂様、神学校創立者のお一人であるメーヤー先生とご家族、そして何よりもこうした出会いを備え導いて下さいました神に感謝の祈りをお捧げしました。

資産の用い方について皆で協議し、理事会において承認された学習環境整備の具体的内容は、リモート授業の拡充を見据えた各教室・礼拝堂の通信環境改善や空調整備、新しい講座開設に必要な設備、そして図書の購入等です。またこれから必要とされる神学生の学習環境整備に対しても、この資産は必要に応じて充当される予定です。

伝道者養成の使命を与えられ取り組まれている日本聖書神学校の学習環境を刷新し充実させる努力は、将来伝道者として遣わされることを祈り願いながら学んでおられる神学生にとってはストレスなく学びに集中出来る環境整備に貢献しますし、遠方にお住まいのキリスト者（献身志願者）に対するリモート授業実現にも寄与するでありましょう。

現在そしてこれからの神学教育に必要な設備を拡充するには、神学生のためにおささげ下さった方のご意志を尊重する、そして主の御心に適うよう祈りを欠くことなく用いさせて頂くことが肝要です。私たちは、学習環境整備資産の有効活用に大きな可能性を見ています。こうした取り組みをお覚え下さり、ご加祷下さいますようお願い致します。

2024 年度春期入学試験（正科生）

★出願期間
2024 年 1 月 9 日（火）～ 1 月 31 日（水）

★試験日
2024 年 2 月 15 日（木）～ 2 月 16 日（金）

★受験資格
1. 大学卒業者またはそれと同等の学力を有すると本校において認められた者。
2. 受洗後 2 ヶ年以上の忠実な教会員であり、伝道の召命を受け、所属教会牧師と役員会の推薦する者であること。

■ 願書のご請求は本校まで。